

A II 部

テ， タ

A II 部では「開始基」のテ 「-(i)=te-Ø」について、また、開始基に由来する「局面変化完了認知基」のタ 「-(i)=t-Ø=a(r)-」について述べる。

A3章では、「開始基」 テ 「-(i)=te-Ø」が動詞に接続する際に生じる音便現象の原則を「動詞基が拍数を保ちながら 2回の接触を 1回に減ずる省力」として説明する。

A4章では、タ 「-(i)=t-Ø=a(r)-」について、話者が局面の変化を認知したことと表現する形式であるものとして説明する。局面の変化は「開始・区切り・完了」としてとらえられる。このタを「局面変化完了認知基」と名付けることにする。

また、テの示す領域の歴史的变化にも触れる。

A 3 章

動詞音便化の原則

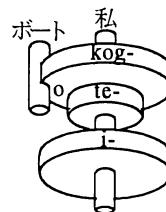
A3.1 音便化を伴って描写される構造

構造伝達文法では音声も扱わざるを得ない。それは、構造を描写する際に音便化の現象などが起こるからである。例えば、構造上では

A3-1> ボートを kog-i=te-θ=i- (図A3-1)
であっても、これが表層の文になると

A3-2> *ボートをこぎていー
ではなく

A3-3> ボートをこいいでー
になる。



図A3-1

構造伝達文法では、なぜそのようになるのかを説明しなければならない。
この章で説明しようとする問題は次のようなものである。

- ・音便はどういう原則を持つのか。
- ・一段動詞はなぜ音便化しないのか。
- ・五段動詞それぞれの音便形はなぜそのような形になるのか。
- ・「買う(w-)」はなぜ促音便になるのか。
- ・「飛ぶ(b-)」はなぜ促音便ではなく撥音便になるのか。
- ・イ音便であるはずの「行く(k-)」はなぜ例外的に促音便となるのか。
- ・「漕ぐ(g-)」はなぜテを濁音化するのか。
- ・「貸す(s-)」はなぜ音便形を持たないのか。
- ・「～たい」形表現(飲みたい)はなぜ音便形にならないのか。
- ・なぜ尊敬4動詞は音便化するのか

これらについて、一つの原則に基づいて説明する。

本章ではこの音便化を「動詞<基>に関わる音便現象」としてとらえ、その原則について「拍数を保ちながら2回の接触を1回に減ずる省力」として説明する。

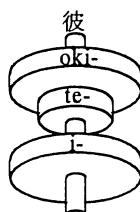
西部方言に異なる音便形がある場合には、その音便形についても考察する。

A3.2 音便の発生

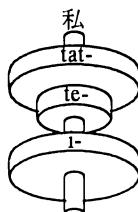
「音便」と呼ばれる現象は平安初期に始まった。その時期には、元来1～2音節であった日本語の語形が、概念の複雑化に伴う複合語化等で多音節化し、付属語の増加とあいまって、文節が長くなりつつあった(馬淵 1971, 釤貫 1996)。音便は文節の中のいくつかの単音を、意味を変えずに省略・変音する形で、発音労力合理化の一環として発生した。

A3.3 動詞テ形の構造

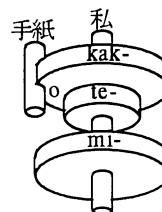
動詞テ形の構造を見るのに、「起きる／立つ／書く」の動詞をとりあげる。テ形の構造はこれらの動詞に助動詞 =te- が添えられた形式となる(図A3-2～4)。この =te- は3つある助動詞のうちの1つで、「開始後の助動詞」である(『文法』10.3)。



図A3-2 起きている



図A3-3 *立ちている



図A3-4 *書いてみる

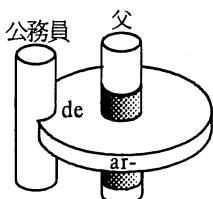
これらの構造をこのまま描写すれば、次のようになる。

- Ⓐ oki-θ=te-θ=i-ru (oki- は「母音末動詞」である。)
- Ⓑ tat-i=te-θ=i-ru (tat- は「子音末動詞」である。)
- Ⓒ kak-i=te-θ=mi-ru (kak- は「子音末動詞」である。)

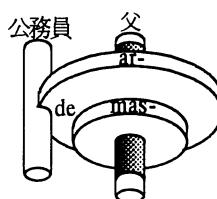
各動詞(oki-, tat-, kak-)は、助動詞 =te- を続けて描写するために「連續描写詞」の -(i) (『文法』9.1)を伴っており、ここに「 -(i)=te-θ 」という基が形成されている。この基は動作等の開始後を意味する(『文法』10.3)ので「開始基」と名付ける。

「基」とは化学の「水酸基 -OH」「メチル基 -CH₃」などのように、要素がいくつか集まって一定の構造形式と一定の性質を保つものである。例えば「見た」の中の「た」は、t と a の2つの形態素から成り立っている。t はもともと te- であり、現代共通語では動作が開始したことを表し、a はもともと ar- であり、存在を表している。この t, a 両者は常に結びついて ta という形で使用されており、意味も一定の時相を表すという点で安定している(A3.6 1) 参照)。このように、複数の構造形成要素(形態素)が常に一定の結合のあり方を示し、しかも意味の上で安定しているものを「基」と呼ぶ(『文法』12.5)。

基は構造形式と意味が安定しているので音による表層への描写には一定の自由度がある。例えば「断定基」を構成する「である」(図A3-5 断定基1)は「だ」とも描写でき、「あります」(図A3-6 断定基2)は「です」とも描写できる(『文法』11.1)。



図A3-5 断定基1 である／だ



図A3-6 断定基2 あります／です

音便形が可能となるのも、「基」がこのような安定性を保持しているからである。

なお、以下の記述において、閉鎖、弾き等の調音体と調音点の接触を一律に「接触」と呼び、この接触の解除を「接触解除」あるいは単に「解除」と呼ぶことにする。

A3章 動詞音便化の原則

音声の表記では、音声記号と音素記号を併用し、音声記号は[]内及び四角枠内で使用し、音素記号は特にそのような限定なしに使用する。

A3.4 「音便」という省力のパターン

Ⓐ～Ⓒのそれぞれの中から「連続描写詞 -(i)」を中心とした部分を取り出してみると、

- | | |
|------------|------------------------|
| Ⓐ' i-∅=te- | (Ⓐ oki-∅=te-∅=i-ru) |
| Ⓑ' t-i=te- | (Ⓑ tat-i=te-∅=i-ru) |
| Ⓒ' k-i=te- | (Ⓒ kak-i=te-∅=mi-ru) |

となる。このそれぞれの音声上の状況を見ると、

Ⓐ'においては調音体と調音点の接触が t のところで 1 回生じている。

i (非接触)-∅(非接触)=t (接触)e(解除)-

Ⓑ'においては、接触が 2 回生じている。

t (接触)-i(解除)=t (接触)e(解除)-

Ⓒ'においても、接触が 2 回生じている。

k (接触)-i(解除)=t (接触)e(解除)-

Ⓑ'Ⓒ'のような子音末動詞の場合に生じる「2回の接触」を 1 回で済ませる省力化のために、表層音声形式にいわゆる「音便形」が生じた。これは、接触を解除する際のエネルギーを 1 回分省力することであった。ただし、拍数はそのまま保たれた。

「テ形音便」とは

開始基の構造形式をそのままに保ちながら、連続描写詞 -(i) の前後に生じる 2 回の接触を 1 回で済ませる形で表層に音声描写する省力法である

と言える。

Ⓐ' (oki-) は i で終わる母音末動詞である。母音末動詞の場合はもともと t の 1 回しか接触がないので、そのような省力化は必要なかった。「食べる (tabe-)」のような e で終わる母音末動詞の場合でも同じである。これが、

一段動詞に音便形が生じない理由である。

A3.5 どのような形で2回の接触を1回にするか

[第1のパターン] (①②③)

-i(接触解除)を省略するパターン……これは -i(接触解除)を省略することにより(つまり接触したままで), 2つの接触を一体化し, 接触を1回に減らす方式である。

① 立つ(tat-) (t末動詞)

Ⓐ'においては -i による接触解除が省略された。その結果, [t] の「接触」したままの待機拍が生じ, これが後ろの t の「接触」と一体化した。この接触の一体化という形で2回の接触が1回に減じ, 省力が実現した。(平安時代には「ち」は [ti] であった。)

t(接触)-i(解除)=t(接触)e(解除)-	(tat-i=te-)
-------------------------	-------------

→ t(接触)	=t(接触)e(解除)-	(tat_=te-)
---------	--------------	------------

② 取る(tor-) (r末動詞)

r(接触)-i(解除)=t(接触)e(解除)-	(tor-i=te-)
-------------------------	-------------

→ r(接触)	=t(接触)e(解除)-	(tor_=te-)
---------	--------------	------------

→ t(接触)	=t(接触)e(解除)-	(tot_=te-)
---------	--------------	------------

[r] は, -i の接触解除が省略されたために, 弾かれず, 接触したままで待機拍となった。この [r] は調音点の近似のために, 容易に t の逆行同化を受けて t に変わり, 後ろの t と一体化した。この形で2回の接触が1回に減じた。[r] は有声音ではあるが, 鼻音ではないので, t を有声化するには至らなかった。

③ 買う (kaw-) (w末動詞)

音便形が成立した平安時代にはこの *w* は [p] から変化した [ɸ] (両唇摩擦音)になっており、接触はしていなかった。しかし、摩擦はしていたので、準接触として扱う。

ϕ(準接触)-i(解除)=t(接触)e(解除)-	(ka <u>ϕ-i=te-</u>)
→ ϕ(準接触) =t(接触)e(解除)-	(ka <u>ϕ =te-</u>)
→ w(非接触) =t(接触)e(解除)-	(kaw <u>=te-</u>)
→ t(接触) =t(接触)e(解除)-	(ka <u>t =te-</u>)

-i が省略されても、[ɸ] は摩擦音なので 1 拍を構成することができた。しかし、歴史的に [ɸ] の音が語中・語尾で摩擦性を失い、半母音 [w] へと変化していく過程(ハ行転呼)で、この拍は 1 拍を保ちにくくなつた。それで t の逆行同化を受け、t の待機拍に変わらざるを得なかつた。このような形で準接触が消え、1 回の接触が実現した。

なお、西部方言では 1 拍を保つために半母音 [w] を [u] へと母音化した。ウの完全な 1 拍が形成されたので、t の逆行同化を受ける必要はなかつた。次に「カウテ → コーテ」の変音が生じたが、このような形でも準接触が消え、完全な 1 回の接触が実現した。

→ w(非接触) =t(接触)e(解除)-	(kaw <u>=te-</u>)
→ u(非接触) =t(接触)e(解除)-	(kau <u>=te-</u>)
→ o(非接触) =t(接触)e(解除)-	(koo <u>=te-</u>)

[第2のパターン] (④⑤⑥)

-i(接触解除)を省略し, t(接触)を有声化するパターン

④ 死ぬ(sin-)(n末動詞)

j(接触)-i(解除)=t(接触)e(解除)- (jit-e-)

→ n(接触) =d(接触)e(解除)- (jin=de-)

-iによる接触解除が省略されて、口蓋化した鼻音 [j] の待機拍となつたが、tの調音点の逆行同化を受け、口蓋化に至らないnの拍となつた。一方、tはこのnの鼻音性の影響を受け、有声化してdとなつた。このような形で有声歯茎接触の1回化が実現した。

⑤ 読む(yom-)(m末動詞)

m(接触)-i(解除)=t(接触)e(解除)- (jom-i=te-)

→ m(接触) =d(接触)e(解除)- (jom=de-)

→ n(接触) =d(接触)e(解除)- (jon=de-)

-iの省略でmの拍が生じ、この鼻音mの影響でtが有声化してdとなつた。次にmがdの調音点の逆行同化を受けてnになり、有声歯茎接触の1回化が実現した。

⑥ 飛ぶ(tob-)(b末動詞)

b(接触)-i(解除)=t(接触)e(解除)- (tob-i=te-)

(→ b(接触) =t(接触)e(解除)-) ((tob=te-))

→ m(接触) =d(接触)e(解除)- (tob=de-)

→ n(接触) =d(接触)e(解除)- (tob=n=de-)

A3章 動詞音便化の原則

解除のない両唇 b 音は無声の p 音と同じで、ここには促音が生じるはずであるが、b は有声音であることを貫くために、調音点を維持したまま呼気により声帯を振動させ、両唇鼻音の m にならざるをえなかつた。後続の t はこの m に同化され d となった。次に m が d の調音点の逆行同化を受けて n になり、有声歯茎接触の1回化が実現した。

[第3のパターン] (⑦⑧)

子音(接触)を省略するパターン……これは第1・第2のパターンのような -i の省略によらず、最初の子音の接触そのものを省略して接触を1回に減じるパターンである。

k と g は共に軟口蓋に調音点のある子音で、母音 -i より奥で調音される。-i の省略で生じる k, g での1拍待機は、口の奥での閉鎖継続であり、負担感が大きい(苦しい)。そこで、k, g による接触そのものが省略されることになり、「イ」の拍を生じた。

歴史的にはこの音便化が他のものに先立って発生したらしい(『国語学大辞典』「音便」)。他の音便是 -i を省略する方式をとった。そうしないとみなイ音便になってしまふからである。

⑦ 書く(kak-) (k末動詞)

k(接触)-i(解除)=t(接触)e(解除)-	(kak-i=t-e-)
→ -i(非接触)=t(接触)e(解除)-	(ka-i=t-e-)

上述の理由により k の接触が省略されて「イ」の拍が生じ、接触は t によるもののみの1回となつた。

なお、「行く(i k-)」の場合は例外的に子音の接触が実行され、-i の解除が省略された。

k (接触) - i (解除) = t (接触) e (解除) -	(ik <u>-i</u> =te-)
→ k (接触) = t (接触) e (解除) -	(ik <u><u>-i</u></u> =te-)
→ t (接触) = t (接触) e (解除) -	(it <u><u>-i</u></u> =te-)

k による 1 拍待機を生じたが、この k は t の調音点の逆行同化を受けて t となった。調音点を 1 つにする際に、軟口蓋よりは閉鎖継続の容易な歯茎の方を選択したわけである。

この「行く」に生じた例外的現象の理由として考えられるのは、次のことであるかもしれない。つまり、もともとは [juwk-] (ユク) であったものが、口語では母音 [u] を脱落させ、[jk-] という形式を生じた。音便を生じたころはまだこの「イ」は、半母音であることの記憶があり、1 拍としては独立しておらず、[u] (終止形) や [i] (連用形) という母音を伴って拍を形成した [k] の存在に依存する音となっていた。他の k 末動詞では [k] を省略しても語幹は拍単位で保つことができた(「hik-」引く、「ak-」開く)が、[jk-] (行く) では [k] を省略してしまうと語幹は半母音のみになってしまふ。つまり、[k] は動詞(語幹)を形成する唯一主要な音であり、これを省略することはできなかつた。それで [k] が発音(閉鎖)され、[第 1 のパターン] となったのであろう。

⑧ 潜ぐ(kog-)(g 末動詞)

ŋ (接触) - i (解除) = t (接触) e (解除) -	(kon <u>-i</u> =te-)
→ -i (非接触) = d (接触) e (解除) -	(ko <u>-i</u> =de-)
→ -i (非接触) = d (接触) e (解除) -	(ko <u><u>-i</u></u> =de-)

やはり上述の理由により、g の接触が省略された。

この語中の g については、『日本文典』(ポルトガル人口ドリゲス 室町末期)やその他の文献の記述から、古い時代には濁音 [g] の前に鼻音的要素

があり ([ⁿg] 金田一 1967), それが直前の母音を鼻音化していた(森田 1977)と考えられている。また、これは結局、ポルトガル語に [g] がなく鼻母音があることや、日本語の [g] やその前後の母音発音と外国人のそれとの差などから考えて、やはり、語中の g は例えれば現在の [nagasaki] の [ŋ] と大きく異なるものではなかった、と考えられるようになっている。g が語頭で [g]、それ以外で [ŋ] というのは、日本のかつての標準語、近畿の言葉であった、という(杉藤 1996)。

そこで、kog- の場合、g は語中にあるので「鼻濁音」[g] であったと考えられ、したがって、kog-i の i は鼻母音 [i] となっていた可能性が高い。t はこの鼻母音 [i] の影響で鼻音・有声化して d となった。「漕いで」の「で」が濁音である理由は、このようにして説明できるものであろう。i はその後、鼻音性を保つ理由がなくなった。

[第4のパターン] (⑨)

摩擦音の随伴を許す、もともと接触1回のパターン

⑨ 貸す(kas-) (s末動詞)

[kaʃite] の [ʃ] は接触はしていないが、摩擦音なので接触に準ずるものとして扱う。

なお、古代中央語のサ行子音を [ts] のような破擦音と見る説もあるが、少なくともイ音便が起こったころのサ行子音は摩擦音だったと考えられる(『国語学大辞典』「音便」)。

\int (準接触)-i(解除)=t(接触)e(解除)-	(kaʃ-i=te-)
$\rightarrow \int$ (準接触)	=t(接触)e(解除)-

-i が省略されたので、[ʃ] の拍となった。しかし、この [ʃ] は口蓋化しているので、-i が省略されてもほとんど変化はなかった。また、[ʃ] は摩擦音なので、そのまま完全に1拍を構成することができ、t に逆行同化され

ることもなかった(③の [w-] との相違である)。つまり、準接触(摩擦)が接触化して t と一体化するという形 [katte] は実現しなかった。

このパターンでは、接触は t の1回だけである。摩擦 [ʃ] は、接触はしていないのだから、存在を許されたわけで、つまり、ここでは音便としては -i が省略されるだけで十分だったのである。s末動詞が音便形を持たないよう見えるのはこのためである。

ただし、西部方言では、平安中期ごろから江戸時代まで、この [ʃ] の摩擦さえをも省力し、第3のパターン(⑦⑧)のように子音を省略して、

殺して [korof-i=te-] → 殺いて [kor-i=te-]

と音便化させていた(『国語学研究辞典』理論・一般「音便」、『日本文法大辞典』「イ音便」)。-i の省力では明瞭な摩擦音拍が残存するので、省力としては不十分と感じられたのであろう。とはいえ、[ʃ] は非接触であり、これを t の逆行同化という形でわざわざ「接触化」して [korot=te-] とするのは省力化の原則に逆らうことになる。このため、-i ではなく、摩擦 ([ʃ]) そのものを省力するに至ったのであろう。

A3.6 開始基「-(i)=te-θ」を含む構造（完了基）

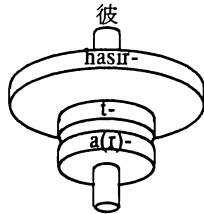
以上、A3.3～A3.6においては開始基の音便について述べた。「た・たら・たり」も音便形をもたらすが、これは各形式の先頭に開始基「-(i)=te-θ」が含まれているためである。

1) 「た」 -(i)=t-θ=a(r)-

「た」(A3.3参照)は「完了基」であり、-(i)=t-θ=a(r)- という構造をしている(『文法』10.5)。この基の前部の -(i)=t-θ は開始基「-(i)=te-θ」が助動詞 =a(r)- を伴って「完了基」となる際に e を脱落させて生じた形式である(『文法』10.3)。(「た」については次章A4章も参照。)

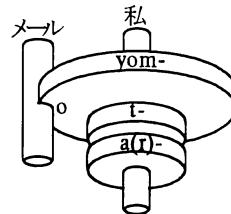
- (i)=te-θ (て) + =a(r)- (あ) → -(i)=t-θ=a(r)- (た)

したがって、「走る」を「走った」に、「読む」を「読んだ」にすると、こうなる。



hasir-i=t-θ=a(r)-

図A3-7 走った



yom-i=t-θ=a(r)-

図A3-8 読んだ

「完了基」の前部が「開始基」なので、その前に置かれる動詞が子音末動詞である場合は、A3.5 で見た音便現象が同じように生じる。ただ、表層音形式では「て／で」ではなく「た／だ」で現れる、という点が異なっている。

2) 「たら(ば)」 -(i)=t-θ=ar-a(ba)

次の例では「たら(ば)」の形が使用されている。ここで使用されている -(i)=t-θ=ar- も「完了基」であり、その前部の「開始基」 -i=t-θ が音便現象を生じさせている。

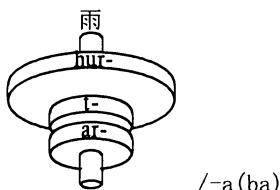
雨が hur-i=t-θ=ar-a(ba)

雨が降つたら(ば) (図A3-9)

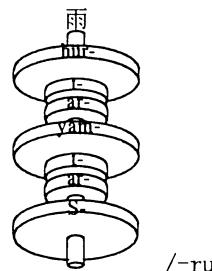
3) 「たり」 -(i)=t-θ=ar-i

雨が hur-i=t-θ=ar-i yam-i=t-θ=ar-i su-su

雨が降つたりやんだりする (図A3-10)



図A3-9 雨が降つたら



図A3-10 降つたりやんだりする

ここにも「完了基」が使用されており、前部の「開始基」が音便現象を生じさせている。

A3.7 文法的な音便形を生じない非「開始基」：「飲みたい」

「飲みたい」は *nom-i=ta.k-* となる。*=ta.k-* という属性は、図A3-12のように動属性を上に載せる形容属性の一種であり、「動属性の表す事態が現実世界に実現することを話者が望んでいる」という構造意味を持っている（『文法』21.2）。

これは「飲みたい」中の $m-i=t$ が「開始基」に関わるものではないからである(図A3-12)。



図A3-11 水を飲んだ



図A3-12 水が飲みたい

「泳ぎたい g-i=t」 「飛びたい b-i=t」 等、他の子音末動詞でも同じで、音声的には同一の形式でも、構造が異なり、開始基を形成していないので文法的な音便形を生じない。

また、「送り手 $r-i=t$ 」「剥ぎ取る $g-i=t$ 」「吹き倒す $k-i=t$ 」などにも同様の部分があるが、これも「開始基」に関わるものではないので、文法的な音便形を生じない。

A3章 動詞音便化の原則

なお、「切手 kir-i-te」「ついたち tuki-θ=tat-i」など「開始基」に関する音便形もあるが、これは名詞としての語の個別的な音便化であって、文法的な音便化ではない。

A3.8 丁寧尊敬基「-(r)ar-i=mas-」の音便：「くださいます」

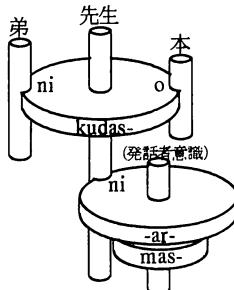
尊敬を表す4つの動詞「くださる／なさる／いらっしゃる／おっしゃる」は、一語の動詞のように見えるが、この中には発話者意識を主体とする「受動態詞 -(r)ar-」が含まれている(『文法』12.5／12.7)。これらの動詞が助動詞「ます」を従える場合には「丁寧尊敬基 -(r)ar-i=mas-」を形成する。

くださる kudas-ar- → kudasar-i=mas- (図A3-13, -14)

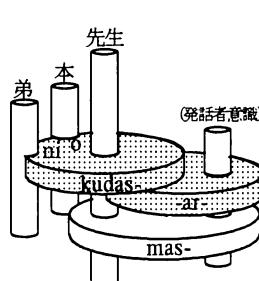
なさる nas-ar- → nasar-i=mas-

いらっしゃる irase-rar- → iraserar-i=mas- → irassyari=mas-
(図A3-15) (『文法』12.7)

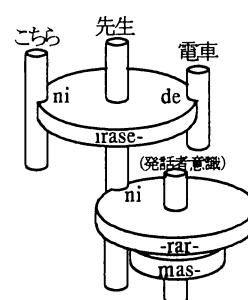
おっしゃる ohose-rar- → ohoserar-i=mas- → ossyari=mas-



図A3-13 先生(に)は
弟に本をくださいます



図A3-14 先生が弟に
本をくださいます



図A3-15 先生(に)は
電車でいらっしゃいます

「尊敬」とは、尊敬対象<先生>がその属性<本を弟にくださる>と結びつくことの心理的影響を発話者が受ける<-(r)ar->もので、受動態の一種である。尊敬対象は態属性 -ar- の ni格に置かれるので「先生(に)は弟に本をくださいます」と描写することになる。kudas-ar- は「接合」(A17.1 ⑤)しているので動属性・態属性が一体化し、かつ<先生>が kudas- の主格にあること

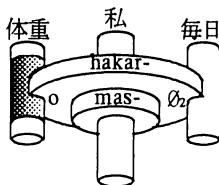
から「先生が弟に本をくださいます」のように<先生>を主格で描写することも可能である(図A3-14)。

ここに形成される丁寧尊敬基では、連続描写詞 -i の前後に存在する2回の接触を、次のように r(弾き)を接触させない形で1回に減じる方策をとっている(A3.4 参照)。

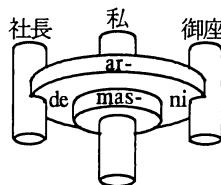
a(非接触) r(接触)-i(解除) =_m(接触)a(解除)
 → a(非接触) _____ i(非接触)=_m(接触)a(解除)

なお、ar-i=mas- という音形式の音便化は、この基において生じるだけで、たとえ音声的に同一形式をとっても異なる構造形式をとる場合には音便形は生じない。それで、「有ります ar-i=mas-」や「足ります tar-i=mas-」、「計ります hakar-i=mas-」(図A3-16)などでは音便化しないわけである。

また、「～でございます -de=go-z(a)-a(r)-i=mas-u」(図A3-17)の場合は、音形式は似ていても、ar- が動詞であって受動態詞ではないので、丁寧尊敬基「-(r)ar-i=mas-」(図A3-13～-15)とは構造が異なっている。したがって、「～でございます」形は、丁寧尊敬基のもたらした音便形ではない。断定基「～で御座(に)あります」が、基として「でござります・でござりんす・でございます・でござんす・でがんす・(で)ざんす・(で)ざあます」のように省力形を模索する過程で一つの可能性として生じさせた形態なのである(『文法』11.1⑤)。



図A3-16 私、体重は毎日計ります



図A3-17 私が社長でございます

本章の内容は『日本語教育』108号(2001)に「動詞音便化の原則－接触の効率化をめぐって－」と題して掲載されたものであるが、日本語教育学会の転載許可(NKG14-48)を受け、若干の加除を施してここに収めた。

A 4 章

構造変化完了認知基 タ

「タ」は絶対テンスでは「過去」を、相対テンスでは「以前」を表す矢印で示される(A9章)が、その際いずれのテンスにおいても「完了」のアスペクトを指し示すことが多い。それで、「タは完了」と考えられがちである。

しかし、実際は「タ」は「(開始前からとらえる)開始」を除き、いかなるアスペクトをも指し示すことができる……「完了」はもとより、「(開始後からとらえる)開始」「区切り」「進行中」「結果状態継続中」「結果状態消滅」「結果記憶継続中」のいずれのアスペクトをも指し示すことができる。

本章では特に「(開始後からとらえる)開始」「区切り」「完了」という3つのアスペクトに共通する「構造変化」に焦点を当て、「タ」という基が「構造変化完了の認知」を表すものとしての側面を持つことについて述べる。

また、「テ」の通時的な領域前進についても述べる。

(タの音便化の原則については A3章 参照。)

A4.1 「タ」は「開始」も表す？

ここに①と②の2つの「開けタ」がある。

A : あの店員が店を開けるようだね。

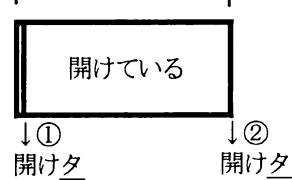
← 15秒 →

B : うん。ほら、①開けタ。

A : 2人だ。2人で開けてる。

B : 2人だと速いね。15秒ぐらいで

②開けタね。じゃ、入ろうか。



(図A4-1)

図A4-1 開始と完了

この①②2つの「開けタ」の中のそれぞれの「タ」は何を表しているのだろうか。タはアスペクトとしては「完了」を表すと言われるが、①②のうちで完了と呼べるのは②だけであり、①は完了とは呼びにくい。①はむしろ開ける行為の「開始」である。

同様の例はいろいろある。

- | | |
|---------------------------------|---------------------------|
| A : みんな今走るよ。用意、ドーン。 | A : 崖から岩が落ちそうだ。 |
| B : ① <u>走つタ</u> , <u>走つタ</u> 。 | B : あ, ① <u>落ちタ</u> 。 |
| A : 懸命に走ってるね。 | A : 海面に向かって落ちている。 |
| B : もうゴールだ。 | B : ドッボーンと② <u>落ちタ</u> よ。 |
| A : みんなすごい速さで② <u>走つタ</u> ね。 | |

『源氏物語』を読もうか読むまいか迷っていた友人が読み始めたのを見て、「そう、とうとう①読んダね。」

と言う。もちろん、まだ読み始めたばかりで、読み終わったわけではない。

修理していたロボットが直って、

「あ, ①動いタ, 動いタ。」

と言う。動きが完了したわけではない。動き始めたのである。

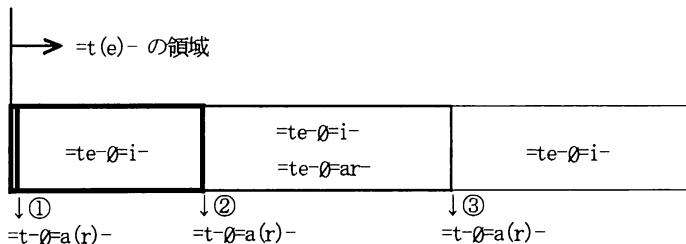
このような①, ②の2つの異なるタを統一的にとらえるにはどう考えればよいのだろうか。

A4.2 タは開始・完了の局面を表す

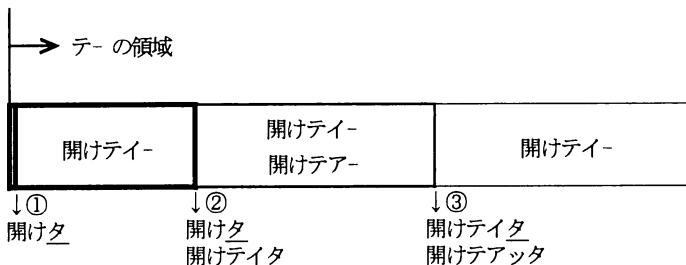
出来事開始とともにアスペクトは「 $\text{テ} = t(e)-$ 」の領域に入る(A4.5 3), 『文法』10.3)が、この領域には「 $\text{テイル} = te-\emptyset=i-$ 」と「 $\text{テアル} = te-\emptyset=ar-$ 」のアスペクト、そして「 $\text{タ} = t-\emptyset=a(r)-$ 」のアスペクトが存在している(図A4-2, -3)。(この図の意味する内容については『文法』13.1 及び 13.4 参照)。

この「 $\text{タ} = t-\emptyset=a(r)-$ 」は『文法』(10.5) で「完了基」と名付けられたものであるが、A4.1 のいくつかの例から明らかなように、この名称では出

来事の完了(②)しかとらえておらず、①が忘れ去られている。



図A4-2 $=t(e)-$ の領域内のアスペクト (形態素表示)



図A4-3 テ- の領域内のアスペクト (カナ表示)

また、図A4-2、図A4-3 から「タ $=t-\theta=a(r)-$ 」には①②に加えて③もあることがわかる。つまり、ここではタで3つのアスペクトをとらえている。

①は出来事開始(直後)

②は出来事完了(直後)

③は結果<状態>完了(あるいは「結果状態消滅」)(直後)

これら3つのアスペクトは、発話の時点が直後ということでは共通しているのであるが、局面そのものとしては、①は開始、②③は完了というふうに異なっている。このうち「タ $=t-\theta=a(r)-$ 」を「完了基」と呼んで差し支えないのは②と③であり、①を同じように呼ぶことには抵抗がある。

では、①②③を統一的に扱おうとする場合に、この「タ $=t-\theta=a(r)-$ 」の基は何と呼んだらよいのだろうか。

A4.3 タの表すのは「局面変化完了の認知」

[ア] ①では、それまで生起していなかった出来事が生起するという形で局面に変化が生じている。

②では、生起していた出来事が完了するという形でやはり局面に変化が生じている。

③では、継続していた結果状態が消滅するという形で同じく局面が変化している。このことから、統一的にとらえようとする場合、「タ =t-θ=a(r)-」は、話者が局面変化(の完了)を認知したことを表すものである、ととらえられることになる。

[イ] また、『文法』(13.8 及び 17.3 注2) で扱ったように、「タ」には継続中の出来事において「認知的完了」(区切り)を示す機能がある。

探しているものを発見して、「こんな所にあっタ」のようにタを使用することがあるが、タを使用して「あっタ」と言ったからといって、その存在がそれで完了し、以後消滅してしまうわけではない。ただ、「今までここにあることは知らなかったが、今は知るところとなった」などのように、その存在に対する認知の形が変わるのである。「なあんだ、こんな所で新聞を読んでいたのか」のようなものでも同じである。

事態「ある／読んでいる」そのものは完了するわけではないのだが、発話者は意識の中で局面の形の変化が完了したことを認知するのである。「タ =t-θ=a(r)-」はこの認知がなされたことを表している。

そこで、[ア][イ]から「タ =t-θ=a(r)-」は統一的に、話者が局面変化の完了を認知したことを表す形式であると言うことができるだろう。

ただし、[ア]と[イ]では事態のあり方に違いがある。[ア]では事態そのものに変化があり、それを反映して局面の変化が認知されるのであるが、[イ]では事態そのものには変化がなく、ただ発話者の意識の中でのみ局面の変化として認知されるのである。

A4章 局面変化完了認知基 タ

以上から、このような「タ =t-θ=a(r)-」（旧称「完了基」）には
「局面変化完了認知基」

という名を与えることにしよう。そして、今後「完了基」という名称は略称として使用することにしよう。

この基の内容を表の形で示せば、表A4-1 のようになる。

局面変化完了認知基としての「タ =t-θ=a(r)-」

表A4-1

A	局面変化完了認知・開始	あつ、走つタ。
B	局面変化完了認知・区切り (意識内ののみの局面変化認知)	あつ、あんな所を走っていタ。
C	局面変化完了認知・完了	一生懸命に走つタ。1着だ。

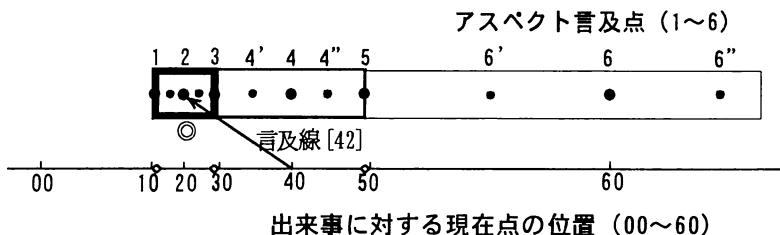
一方は事態の変化を伴う局面変化完了の認知であり、【A】「局面変化完了認知・開始」、【C】「局面変化完了認知・完了」と名付けることができる。

他方は事態の変化完了を伴わない、意識の中だけでの局面変化完了の認知であり、【B】「局面変化完了認知・区切り」（『文法』13.8）と名付けることができる。

図A4-2、図A4-3 の①は【A】に属し、②③は【C】に属する。

A4.4 時空モデルでの表示

では、この基は、時空モデル上ではどう表示されることになるのだろうか。
時空モデルを呼び出してみよう（図A4-4、『文法』図17-1）。



図A4-4 時空モデル(現在点と言及点の位置関係)

この図のままで扱える [C] (表A4-1) から検討する。

[C] 局面変化完了認知・完了 (事態の完了・消滅) ……②③のタはアスペクト言及点 [3] (開けた, 開けていた) 及び言及点 [5] (開けていた) に関わるものなので、例えば「現在」(直近過去)であれば、言及線 [33] 及び [55] で示すことができる (『文法』17.3)。

現在・完了 [33] はい, 開けましタ。お入りください。

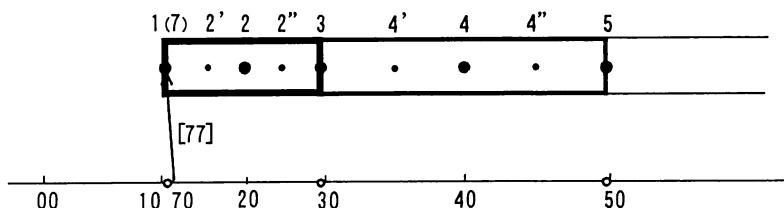
現在・結果状態消滅 [55] 今まで開けていましタ。

[A] [B] の場合は、図に若干の補訂が必要となる。

[A] 局面変化完了認知・開始 (事態の開始) ……言及点 [3] 及び [5] が完了のアスペクトを持つのに対して、[1] (開ける) は開始のアスペクトを持っている。しかし、ここで必要なのは、①(開けた)のタの、開始の成立したことを示すアスペクトである。そこで、このアスペクトを表すものとして新たにアスペクト言及点 [7] (開けた) を設置することにしよう (図A4-5)。

[1] は「事態開始」の瞬間を前からとらえ、この [7] はそれを後ろから「成立」としてとらえるものとするのである。こうすることで、同じ言及点を [1] とも [7] ともとらえることができるようになる。(それで、図示において [7] は()の中に入れておく。)

また、テンスでは、事態の開始直前の位置として [10] が設定してあるわけだが、ここで新たに開始直後の位置にも [70] という時点を設定することが必要となった (図A4-5)。



図A4-5 [77] 開始のテンス・アスペクト

この新たな設定によって「局面変化完了認知・開始」を
 現在・開始後 [77] あつ, 走っタ。
 過去・開始後 [27] このビデオ, やっぱり見タね。(現在見ている)
 以前・開始後 [77] 明日走っタ人はゴールまで3時間走る(ことになる)。
 などの2桁数字で表示できるようになる。

(「以前」は従文中の相対テ ns。A9章参照。)

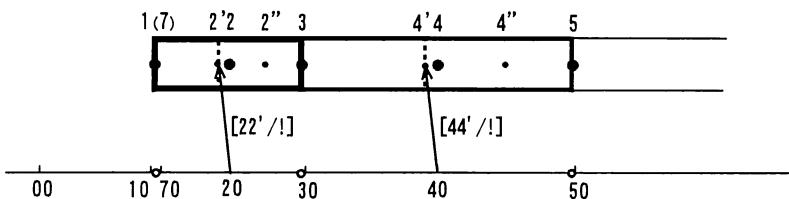
[B] 局面変化完了認知・区切り (事態は不变)……これは事態の変化を伴わない。事態はそのまま継続しており、意識の中だけで、あたかもそこに局面の変化があるかのような扱いになる。

そこで、[2'] [4'] に「みかけの局面変化」を設定し、これを「区切り」として点線で表示し(図A4-6)，[2' /] [4' /] と記号化する。すると「局面変化完了認知・区切り」は[22' /] と[44' /] という言及線で表現できる。

しかし、たとえば[44' /] のままでは[40] が[4' /] の直後にあるということが示せないので、特に直後であることを示すために「!」の記号を用い、これを言及線表示に添えるのがよいかと思われる。

[44' /!] あつ, 開けていタ。

のようになる。この[44' /!] の読み方は「44' 区切り直後」となる。同様に[22' /] も[22' /!] 「22' 区切り直後」(あつ, 開けていタ) とするのがよいだろう。



図A4-6 「区切り直後」

必要に応じて[6' /] [66' /!] も設定することができる。

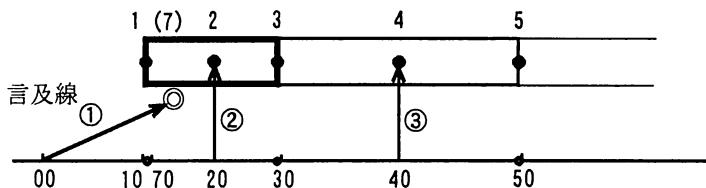
以上のようにして局面変化完了認知を図示することになる。

A4.5 テの歴史

1) 3項対立型と2項対立型

諸方言での調査・研究が進むにしたがい、日本語のアスペクト体系には、「3項対立型」「2項対立型」の2種類があることが明らかになってきた。両者は「進行」と「結果」を同じ形式で表すかどうかという基準によって区別されている(工藤 2002)。

このことを「日本語構造伝達文法」の方法で考えてみるために時空モデル図中に3本の言及線を設定する(図A4-7)。出来事を表す動詞としては、継続性のある「*hur-* 降る」を使用する。



図A4-7 3本の言及線

3項対立型では言及線①②③の表現がすべて異なるが、2項対立型では②と③の表現が同じで①が異なっている。表A4-2 のとおりである。

「3項対立型」と「2項対立型」

表A4-2

時相	未来まるごと	現在進行	現在(完了)結果継続
言及線	① [0◎]	② [22]	③ [44]
3項対立型	<i>hur-</i> 降る	<i>hur-i=or-</i> 降りよる	<i>hur-i=t-Ø=or-</i> 降つとる
2項対立型	<i>hur-</i> 降る	<i>hur-i=te-Ø=i-</i> 降って(い)る	<i>hur-i=te-Ø=i-</i> 降って(い)る

or-, i- ともに存在を表す。

日本語現代共通語は2項対立型であり、3項対立型は西日本方言に多いという。工藤(2002)では、さらに精密な実態調査をしてみなければならないしながらも、一応、3項対立型の西日本方言の方が古いという仮説が成立し

そうであるとしている。(3項対立型の $t-$ は $te-$ に由来する。)

3項対立型ではテ($t(e)-$)の領域は出来事完了時 [33] に始まるが、2項対立型では出来事開始 [77] とともに始まる。3項対立型の方が古いとすれば、歴史的にテの領域が前へと拡大したわけである。その結果「進行」が「結果状態継続」と同じ表現(テイル)をとるようになり、「一般アスペクト論の観点からみると、運動の時間的展開段階としてはまったく異なる〈進行〉と〈結果〉が同一形式で表現される点で、特異な体系」(工藤 2002)である2項対立型が生じたのである。

では、なぜこのようなことが起こったのだろうか。このことについて考えてみたい。

2) 形態素 $=t(e)-$ は「完了」 \rightarrow 「事象の確認」 \rightarrow 「開始後」と変化

テの領域は元来3項対立型のように出来事の完了と共に始まる(図A4-8)のが理にかなっている。

テについては『岩波古語辞典』p. 1504 接続助詞「て」の項に
助動詞「つ」の連用形「て」の転化したものであるらしい。
とある。そこで、p. 1473 の助動詞「つ・ぬ」の項〔語源と意味〕を見ると、
(助動詞「つ」は) 動詞の「棄(う)つ」と活用が同一である。また、意味的にも、「棄つ」と根本的な共通性を保っているから、「棄つ」から「つ」が転成したことが推定される。つまり、物を意志的に眼前にほうり出してしまう意の「棄つ」のはじめの母音uを脱落した「つ」は、作為的・人為的な動作を示す動詞や、使役の助動詞「す」「さす」の下について、すでに動作をしてしまったという完了の意を示す。

とある。

※この引用において、引用者は「ぬ」にあたる部分を除外した。
下線及び冒頭の()内は引用者による。

つまり、形態的にはテ $=te-$ は古語の動詞「棄(う)つ $ut-u$ 」の頭の母音 u を脱落させてできた ツ $t-u$ という助動詞の連用形である、ということ

である。助動詞ツは、下二段動詞である「棄つ」から下二段活用を受け継いで、表A4-3 のような活用をする。

ツの活用

表A4-3

未然形	連用形	終止形	連体形	已然形	命令形
テ =te-	テ =te-Ø	ツ =t-u	ツル =t-uru	ツレ =t-ure	テヨ =t-eyo

古語の二段活用なので語幹相当部が te- と t- の二通りある(相補分布)。

いま話題にしているのは連用形のテ =te-Ø である。

テは意味的には「すでに動作をしてしまったという完了の意」を持ち、基本的に完了のアスペクトを表すことから始まった。

それで、この段階ではテの領域は図A4-8 のように示すことができる。



図A4-8 初期のテの領域

これは、とりもなおさず、「3項対立型」のテ(t-)の領域である。3項対立型はこの領域を今にいたるまで保っているのである。

一方、さらに「つ・ぬ」の項【語源と意味】の先に進むと、こうある。

平安時代に入って「つ」の原義が忘れられ、完了の意が次第に薄れて来て、「つ」の表現するところが確認へと移る……(後略)……

つまり、平安時代に入って「確認」のムードをも表すようになったわけである。

また、『古典語現代語 助詞助動詞詳説』p.447 にはこうある。

助動詞「つ」は事象を確認するに用いるので、「つ」から転じた「て」も同じ意味を表わし、ある事実の存在を確めたうえで、他の事実が並存し、または継起することを示す。

ちなみに『日本文法大辞典』の古語・接続助詞としての「て」の項を見ると、「意味」に、こうある。

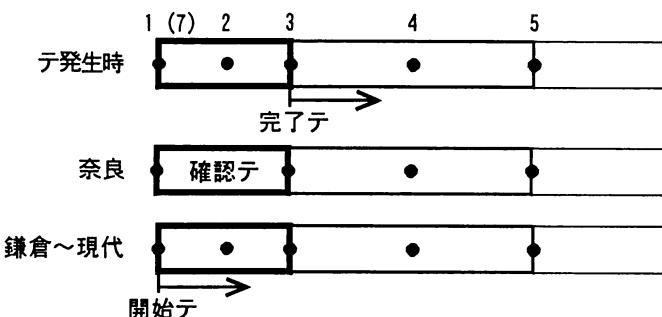
ある事実がすでに存在していることを確認しながら、他の事実がそれにつづいて起こることを示すのが、本義であるが、次第に、さまざまな意味・用法を生じて、現代に至っている。

※以上、引用内の下線は引用者による。

テはアスペクトの「完了」を示すことが最初の機能であったが、「事象の確認」（「ある事実がすでに存在していることを確認する」）というムードを持つようになった。

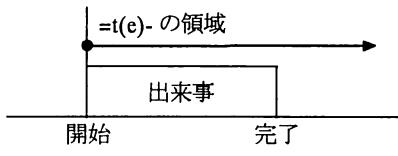
現代共通語では、テは「書いテ(ある)」（書いたあととの状態が続いている）の「書いテ」のように完了時以降のアスペクトを意味すると同時に、「書いテ(いる)」（書き始めたあと、継続中である）の「書いテ」のように開始時以降のアスペクトも意味することになっているが、この「開始時以降」のアスペクトは「事象の確認」（「ある事実がすでに存在していることを確認する」）ムードに由来するのであろう。

すなわち、「完了」のアスペクト(テ発生時)が「事象の確認」のムードを生み(奈良時代以前)、「事象の確認」のムードが「開始後」のアスペクトを生んだ(現代に至る、次項3)参照)，といえる(図A4-9)。



図A4-9 テの領域の拡大(前進)

現代共通語のテの示す領域は、出来事の開始とともに始まるようになってるので、図A4-10 のように示すことができるわけである。



図A4-10 現代共通語のテの領域

2項対立型は以上のようにして形成されたのであろう。

3) いつから「開始後」に

ただ、このテの領域前進はすでに院政鎌倉時代にはかなり実現していたようである。『日本語文法大辞典』の「いる(居る)」の項にこうある。

「て」を介した「てゐる」の形式は既に『源氏物語』においても相当数見られるが、「いる」単独で動詞に下接する複合動詞の例のほうが多い。

「てゐる」の場合、元来は、ある動作をして、そしてそこに「居る」という連続的な動作として表現するものであったが、「ゐる」の意味が形式化し、次第に進行や状態を表すようになっていったもので、院政鎌倉時代にはかなり定着を見たものである*。

また、同辞典「進行形」の項にこうある。

古代語では、動作の継続を表す有標の形式は存在しないようで、動詞のはだかの形がそのまま進行を表すのに使われる*²。

そこで出来事の進行[2]を表す形態でみると、yorokob-(古代), yorokob-i=wi-(奈良), yorokob-i=te-θ=wi-(平安末期)という順に発展したことになる。
鎌倉・室町にテ(=te-)が開始以降を表すことが確定したようである。

*1 同項には、奈良時代には「並びゐる」のような複合動詞の形式で用いられていて、「てゐる」の形式は存在しない旨の記述があるから、「てゐる」は平安時代に生まれたようである。そして、12世紀初頭、平安末期の……『今昔物語集』では、「ている」は従来「いる」が担っていた進行態の用法に拡大しつつある……
とある。

*2 韓国語の現代語で進行を表す動詞のはだかの形は省略によるものようである。